令和６年度第２回京都市図書館協議会摘録

○日　　時：令和７年３月１３日（木）午前１０時００分～１２時
○場　　所：京都市生涯学習総合センター　３階第４研修室
○出席委員：［９名中６名出席］
　　岩崎　れい　委員
　　梶川　敏夫　委員
　　後藤由美子　委員
　　澤田　瞳子　委員
　　高田　敏司　委員
　　廣瀬　千景　委員（五十音順）
○欠席委員：３名
○傍 聴 者：１名

１　開会

（１）中央図書館長の挨拶

今の図書館は様々な問題を抱えている。図書館にも役割があり、どのように果たしていくか考えていく必要がある。私たちは読書力という、本を読む力を養う必要がある。読むという力はすごく大切なことである。図書館として一番大切な協議会となるので、本日は、いろいろな御意見を賜りたい。

２　協議事項

（１）協議事項である「京都市図書館の現状と課題、これからの図書館の在り方検討にむけて」について、事務局から以下の事項を説明した。

松井市長が就任されて、新しく京都市政をどのようにしていくのかを示した「新京都戦略（案）」を２月市会で打ち出している。

戦略で重視する３つの視点があり、「ひらく」「きわめる」「つなぐ」とある。これらのキーワードを軸に、重点的に取組むべき事業がリーディングプロジェクトとして示されている。

図書館は「ひらく」中でリーディングプロジェクトとして位置づけられ、「公共空間をまちに開くパブリック「テラス」プロジェクト」として、「図書館における交流機能を高めるなど多機能化し、カフェなど居心地のよい第三の居場所（サードプレイス）づくりに取り組むとともに、さらには、新たなつながりや活躍の機会を創出し、価値や気づきに出会える場所（フォースプレイス）に。」と方向性が示されている。このため、市の方向性として公共空間をどのように活用していくのかを検討していく中で、図書館をサードプレイス、フォースプレイスといった形で検討していきたいと考えている。図書館の現状を踏まえ、将来、何ができるのかを認識しながら図書館協議会の皆様にもご意見をいただきたい。

まずは、京都市図書館における現状と課題について説明させていただく。京都市は他都市のように大きな中央図書館１館ではなく、中央図書館が４館あり、中央図書館機能を４館で分担している。地域図書館が１５館、子育て図書館が１館、移動図書館が１館、合計

で２１館ある。

京都市図書館では、築４０年を超えた館が５館、３０年を超えた館が７館あり、全部で１２館が老朽化の課題を抱えており、今後どうしていくのかが課題になっている。

その中でも、図書館では様々な取組を行っている。ブックメール（図書館運搬トラック）で各館をつなげ、最寄の図書館の窓口やネット予約により、市内の蔵書をどの館からでも借りれるサービスや、府立図書館や、府内の大学図書館との相互貸借も実施している。

電子書籍サービスの取組や不用になった図書の有効活用と市民の読書活動推進のため、ブックリサイクルを実施している。

また、地域性を活かしたサービスとして、右京中央図書館に京都大辞典コーナーの設置や、書店組合と連携した京都本大賞の関連書籍コーナーも設置している。

学校連携としては、青い鳥号で学校へ出向き、ブックトークや読み聞かせ、野外読書会などの実施や、京都市立堀川音楽高校の生徒による「０歳からの絵本コンサート」を実施している。

学校連携以外にも多様な世代を対象とした取組として、各館でチャイルドケアプランの実施や、小学生を対象に読書のリーダーを養成する「ジュニアライブラリアン」養成講座を実施している。

今後の充実予定の取組として、来館不要で WEB で利用者登録が行えるオンライン登録の検討や、施設やイベント先で利用者登録を行う、出張図書カード作成サービス、書店組合との連携、私設図書館との連携等を検討している。

図書館の現状の課題としては、中学生、高校生、大学生の利用が少ない。ただし、京都市だけではなく、全国的に同じ動向であり、ティーンズ世代をどのように取り込んでいくかが課題となっている。その中でも、「にぎわい」や「交流スペース」を備えた図書館や、あらゆる世代にとってのサードプレイス（第３の居場所）となる図書館を目指していきたい。

続いて、政令指定都市で見ると、登録率は８位、図書館の数は５位、蔵書回転率は１位、蔵書数は１４位、人口１００人当たりでみると１７位、司書数は２位、図書館の延床面積は１５位、人口１００人当たりでみると１８位となっている。

強みとしては、小規模な地域図書館を市内各所に整備し、司書の専門性や住民の意見を活かす形での選書を行うことにより、規模は小さいながらも地域密着のきめ細やかな図書館サービスを展開している。

弱みとしては、中央図書館は政令市でもっとも狭く、蔵書スペースも限られ蔵書数も少ない状況。メディアセンター機能やより充実した図書館サービスを展開していくことに課題がある。

中央図書館の状況を神戸市中央図書館や神奈川県の大和市図書館など、他都市の図書館と比較すると、対大和市図書館で、延床面積は中央図書館の約３倍、交通アクセスは、大和市図書館は駅から徒歩３分であり、京都市中央図書館は最寄駅から徒歩１５分かかる。

閲覧スペースでは、京都市図書館と府立図書館はで自習不可だが、神戸市中央図書館や大和市図書館で広い空間があり、図書館では自習が可能となっており、このあたりも論点の一つと考えている。

これからの京都市図書館の在り方について、現在、庁内でも検討を進めている。『みんなが集い、学び、繋がっていくパブリック「テラス」』として、これまでの図書館機能を確保しながら、これから求められる図書館機能を複合し、新京都戦略（案）で示されてい

る「パブリックテラス」の視点も踏まえて検討を進めているところ。目指す図書館像としては、地域コミュニティの核であり、まちづくりの拠点となる図書館を核とした多機能、包摂力ある次世代複合施設（フォースプレイス）の整備を検討していきたい。

全国の特色ある図書館の例として、武蔵野プレイス、せんだいメディアテーク、ぎふメディアコスモス、茨木市のおにくるなどがある。それらの施設は図書館が核となり、様々な機能を含めている。様々な方に利用していただき、新たな気づきが生まれるような施設であり、このような施設が全国でも展開されており、京都での検討においても先行事例として参考としたいと考えている。

現在２月市会では予算市会を実施している中で、新しい図書館構想に向けた「つながる。LIB×LAB（リブ・ラボ）プロジェクト」として 1,500 万円を予算要求している。事業項目は２つあり、１つ目は「新しい図書館構想検討に向けた市民意識調査の実施」で、市民の方が図書館に対してどのようなニーズがあるのかを調査したいと考えている。図書館利用者だけではなく、幅広く市民の方から調査を行う予定としている。

２つ目は、「サードプレイスプランの施行実施」として、地域住民にとってサードプレイスとなる、特色ある図書館づくりを進めるために、大規模な施設改修を伴わない空間づくりを試行的に実施し、その効果を検証して全市展開を視野に入れて検討していきたい。

３　（１）協議事項「京都市図書館の現状と課題、これからの図書館の在り方検討に向けて」に関する意見

意見　新京都戦略（案）のパブリックコメントにも意見したが、図書館の多機能化が気になっている。

京都市では半径２㎞の範囲で２０館の図書館があり、それぞれが狭い図書館なので、現状では、施設が狭く多機能化は難しいのではないかと思っている。

司書がたくさんいることはすごくいいことだと思っている。子どもの本コンシェルジュについても素晴らしい取組だと思っている。

醍醐中央図書館では、子どもの本コンシェルジュがいることでジュニアライブラリアンを育てる取組もあり、司書の仕事を体験する取組や図書館や司書の仕事を学んだりして子どもたちもいきいきと活動していた。

先日、醍醐中央図書館でボードゲームを楽しむ企画があり見学に行った。世界的にも図書館資料の一つとしてゲームを所蔵し、遊べるスペースのあるところもふえていると聞く。醍醐中央図書館ではライブラリアンの子どもたちが中心に、来館した子どもたちに教えて一緒に楽しんでいた。そのボードゲームの近くに関連するような本が置いてあった。その光景を見て、来たくなる図書館は一つにはこういった雰囲気だと感じた。

単にコーヒーを飲めるだけではサードプレイスにならないと思う。

回答　ご意見のとおり単にコーヒー飲める場所を作りたいわけではなく、どのような機能と組み合わせることで図書館がよりよい空間になるのかも含めて、来年度の市民意識調査で市民のニーズを把握したいと思っている。また、市役所の関係機関とも連携しながら検討を進めていきたいと思っている。

意見　過去に、奈良国立文化財研究所で研修を受けた時、全国から関係者が集まっていた。その時に知り合った方が後に佐賀県武雄市の教育長になり、久々にお会いしたときの話では、当時、図書館を整備しようとしていたが、人口５万人（京都市の人口の１/28）の地方都市では図書館を整備することが極めて困難と聞いた。その後、同じ名前の方が

市長のときに、ツタヤが指定管理で運営することになり、運営した当初は様々な問題があり、裁判になったりしていた。しかし、先日のニュースでは１２年間で約 1,000 万人の入館者があったと聞いた。そうすると、この１館で年間８０万人前後の来館者がいるということになる。この入館者数には図書館内の売店で本を購入した人や喫茶を利用する人、外国人観光客などの数字も含まれると思われる。この図書館のコンセプトは、いつでも行きたい図書館、リラックスできる図書館とされ、車も６０台駐車でき、バスも無料で駐車できるなど様々な利点があるようで、参考にしていただきたい。京都には国際的な企業も多くあり、そういった企業から寄付もいただきながら中心的な図書館を検討してほしいと感じた。

意見　京都市の図書館での最大の問題点は自習室だと思っている。サードプレイス、フォースプレイスを目指すことは、市民活動との関わりから見ても大事だと思うが、現時点で自習室がないことで、セカンドプレイスにもなれていないと感じている。

先日、陸前高田市の図書室を見学した際、最初にまず、震災関係のコーナーがあった。震災の被害状況や、震災からの復興に関する書籍、たとえば家を建てるための建築関係の本などがたくさんあった。その先に児童コーナー、その奥に自習ができるコーナーがあった。その時は中学生がたくさん来ていた。その光景を見ていると、図書館は生活に密着した場であり、陸前高田市は震災の被害が甚大だった場所であったが、図書館の中の並び方を見ると、震災関係の資料があり、次に一番大事な子どもたち、その奥に自習コーナーという生活に密着した場として必要にされる場であることが大事だと感じた。その図書室の隣にスーパーや商業スペースもある。子どもたちにとって大事なことは、勉強であり生活であることを考えると、自習室があるから勉強できる。いつでも簡単に行くことができる自習室ということが子どもたちにはとても大切なことだと思う。図書館の本質的な機能として学びや考え続けるといったことを第一に考えていただきたい。

サードプレイスを考える前にセカンドプレイスである図書館であることを求めていただきたい。

全国各地の図書館を見ていると、書架があるスペースとは全く違う部屋が自習室になっている図書館もある。スペースの問題があることはわかっているが、他都市の図書館と比べると京都市は劣っていると思う。

新しい図書館は目を引くが、京都市の図書館は２㎞圏内で歩いていける。他都市のように、車でしか行けない大きな図書館は、休みの日しか行けない図書館になってしまう。色々な世代でも一人で行けるということが京都市の一番の強みだと思っている。

意見　中学生、高校生は自習室が欲しいと思っている。自分の居場所として一人で静かに本を読む場所が欲しいと聞く。

意見　京都市の図書館はセカンドプレイスにもなりきれていない中で、サードプレイスにすることは無理があると感じる。サードプレイスにするにはスペースの事も考えると厳しいと感じる。

基礎データとして、予算の推移をわかりやすく提示してほしいと思った。

今後は予算を確保することが非常に大事になってくる。予算を獲得していくために市民は当然だが、庁内に向けても予算獲得に向けて働きかけていってほしい。ランニングコストだけで表にしてもらえたらありがたいが、現状予算としては減っているのか？

回答　予算は減っていない。維持はできているが、新しく建物を作るような予算は確保しづらい。御意見のとおり、戦略的に進めていく必要がある。

意見　最近はインフレのため、実情は下がっていると思う。本の値段も上がっている。予算の確保のために市民や庁内外アピールしていってほしい。

利用者層のデータで、１０代の利用が少ないということだが、当然だと思う。学生は学校の図書館を利用している。学校図書館の利用状況も含めて分析してもいいと思う。学校図書館や大学図書館も含めた京都市としての総合的な図書戦略といったことを検討してもいいと思った。

新しくサードプレイスを建てるとなると、今の京都市では厳しいと思う。例えば、小学校が統合しているので跡地を活用することとか検討していってほしい。

あるいは北山付近で京都府のアリーナ構想があったが、京都市も京都府と協力して図書館とか提案してもいいのではないかと思った。

回答　御指摘いただいたとおり、現状ではスペースの問題もあり、難しい課題ではあるが、京都市図書館も老朽化してきており、新しい図書館を建設することになれば、様々な公共機能を兼ねたものにするなどを、教育委員会から提案している状況。

閉校施設についても、教育委員会としてどのように活用していくか検討している状況である。

意見　中学生や高校生は忙しいので、公共図書館を使えず、学校図書館を利用しているというのが現状であり、10 代の公共図書館の利用が減っているのは不思議のないことだと思う。ただ、それでよいということではなく、学校図書館と共に公共図書館も、10 代の利用の向上を目指すことが重要だと感じた。図書館というところは学びの権利を確保するところでもあり、知る権利も確保するということが公共的に大事なポイントだと考える。

意見　小学生は校区外に行くときは親と一緒というルールがある。保護者の方も仕事があるので一緒に行くことが難しいことが多い。上京区だと中学生であっても上京区に図書館がないので、大垣書店のカフェなどで本を読んでいる状況もある。私は施設で働いているが、高齢者の方はすごく本を読まれる。図書館で本を借りて施設に持っていくとすごく喜ばれる。その中でも絵本に興味を持たれる方が多いので、高齢者が行きやすい施設を作っていただきたい。

意見　１９７０年代の図書館構想から発展して、図書館の利用についても時代にあわせて考え方を変えていく必要があると思う。

来たくなる図書館はどういったものかを考えると、カフェを置く図書館もあるかと思うが、何を目的として設置するのか、課題を見つけてから検討していくことが必要だと思った。

都市によっては自習室を別室に設置しているところもあるが、別室にあると本との関連性がなくなってしまう。図書館の機能を使ってもらえる自習室があればいいと思うが、自習室について委員の皆様はどのように考えているかお聞きしたい。

意見　最近の子どもたちは、自習するために図書館へ行くのだろうか？話で聴くのは塾に行って、塾の自習室で勉強していると聞く。右京中央図書館であれば、レファレンスルームが、ガラスで区切られているので、その部分を自習室にして中高生に開放することを検討してもいいのではないかと思った。

武雄市の図書館は、民間委託の第一号として、注目されたが、問題が多い図書館だ

った。建物の配列も、ツタヤとスターバックスが良い場所を取っており、そこを通らないと図書館まで行けないような造りになっている。T ポイントカードが貸出カードを兼ねていることも個人情報の提供になってしまわないか。公共のものを民間企業に売り渡したように感じた。見た目が良いので、全国でも広がってきている。しかし、図書館という施設に民間企業が入ってくることは、果たしていいのか検討しないといけない。すべて税金で公共設備を建てることは難しいかもしれないが、国が進める PFI（公共施設の設計・建設・維持管理・運営などを民間の資金や経営能力、技術的能力を活用して行う手法）ですることが本当にいいのか十分議論する必要がある。

意見　自習室と便宜上呼んでいるが、図書館のスペースと切り離すことは避けた方がいいと思っている。同志社大学の図書館を建て直している最中だが、以前の図書館は非常に広く色々な所に机があり、学生が学ぶことができていたが、現在は建て直し中のため、小さい図書館になっている。図書館の中ではスペースが取れないため、自習室は講義室を開放している。その状態だと、図書館と自習室を行き来している学生はほとんどいなく、図書館は本を借りるだけの機能に陥りつつある。

本を借りて勉強をして、気になったことを図書館で調べるといった学びの相互関係が広がっていかない。自習室を別で設けると学びが分断されている。受験勉強や資格勉強など、必要とされる方にとって自習室は必要な場であり、そこから本へ繋がる場であってほしい。

ツタヤ図書館の話になるが、CCC が運営している図書館もあるが、各館同じ配列になっている。お土産売場があり、次にスターバックスがある。そこを通ると図書館がある。もちろん、それによって人が集まることもある。若い世代や子どもがたくさん出入りしている。書店が色々な取組をしてきたが、人が離れていってしまったことを考えると、書店の行ってきた例から学ぶことも必要。

サードプレイス、フォースプレイスを目指すとしても、図書館としての本質を見失わないようにしてほしい。

意見　子どもたちは塾に行っているが、塾の自習室も個室というわけではない。図書館に自習室を作る際も、個室でなくてもいいと思う。少しの仕切りがあれば問題ないと思う。社会人でも資格の勉強等であれば家では集中しにくいと思うので、図書館で調べながら勉強することができるといい。

意見　資料にある各団体との連携とあるように、ネットワークを駆使するなどして広げていくことが必要だと思う。京都駅にある市立芸大の図書館は市民も利用できるが市民にあまり知られていない。市立でも府立でも高校の図書館を開放するなど連携していくことができればいいと思う。

回答　御指摘のとおり、京都には大学がたくさんあり、大学図書館の本も借りることができるなど、民間の図書館もたくさんある。そういった場所でも自習が可能なので、そういった情報を市立図書館がまとめて発信していきたいと思っている。

整備の話では、市の財政で何十億と出して建物を造ることは困難だが、民間企業が資金調達を行い、複数年契約することにより、単年度の経費を少なくする PFI といった手法も全国で増えてきている。これは、民間が公共施設の整備を行うとともに、施設の完成後も、引き続いてその業者が運営まで担うといった手法であるが、これから図書館を整備していくにあたっては、公共事業や直営、財団委託も含め、それぞれの整備手法、運営手法の長所、短所をしっかり精査し、議論を深め、慎重に考えていく

必要があると考えている。

意見　PFI で実施した場合に経費が安くなるのは人件費を削っているからであり、非正規の職員が増えることになる。人件費が削られることは司書が専門職として尊重されていないからである。人件費にしわ寄せがいくことが良いのか考える必要がある。

４　協議事項

（１）協議事項である「京都市における関係団体との連携事業について」について、事務局から以下の事項を説明した。

京都市の新たな方針として、図書館の多機能化、その中には居場所や交流拠点しての図書館とういうことが考えられている。京都市図書館としても様々な団体と連携をしてきたので紹介させていただく。

地域連携として、まちライブラリーや子ども食堂が増えてきており、それらとの連携事業の一例として「and happiness」と吉祥院図書館との連携を実施している。「and happiness」は設立１年の新しい施設であり、今後も連携を進めていく。これから読み聞かせをしたいと思う大人の方を対象にした講座等も実施している。

山科図書館では、文学探訪を実施しており、「ふるさとの会」と連携している。

東山図書館では、「東山まちじゅう図書館プロジェクト」と連携し、どういった図書館が欲しいのか、地域の人たちで意見を出し合う取組を実施していた。

北図書館では、裏千家と連携して「おいしいお茶」という企画を実施し、お茶に関係した書籍を集めてコーナーを設置した。

学校、幼稚園等、公的な場所との連携も実施している。

伏見中央図書館では京都工学院高校と連携し、学校の特色を活かしてソーラーカーを作る企画を実施している。

書店との連携として、文科省からも図書館と書店の連携を言われているが、書店組合が開催している KYOTO　BOOK　SUMMIT に京都市図書館も参加させていただいた。

また、丸善京都本店と連携し、子どもの本コンシェルジュが選んだフェアを企画しており、図書館の PR にもなっている。

企業との連携もあり、（株）ロマンライフと、子どもみらい館の子育て図書館と連携し、子どもの本コンシェルジュが出張し、おはなし会を実施した。

課題として、図書館としては色々な事を企画・実施しているが、まだままだ知られていないことが多いので、広報に力を入れていきたい。

５　（２）協議事項「京都市における関係団体との連携事業について」に関する意見

意見　京都市でも、交響楽団や動物園、美術館もあり、専門的な知識を持っている方も多い。市役所内での連携も検討してほしい。

意見　京都には様々なジャンルの企業がある。大学でも授業をしていただく会社の方もいる。伝統文化など、一般の方ではなかなか届かないような企業と連携することで新たな出会いがあるかもしれない。

意見　移動図書館などがあることを始めて知り、もっと活用していけばいいと感じた。どのようにすれば呼ぶことができるのか等、もっと発信してほしい。

また、子どもたちはスポーツをしている子も多いので、スポーツクラブのように子

どもたちが熱心に取り組んでいるところと連携すると図書館利用を促進できるのでそういったスポーツクラブとの連携も検討してほしい。

意見　企業との連携で、京都はソーシャルビジネスや社会課題を解決しようとする企業が増えている。ベンチャー企業等は活発なので、是非そのような企業と連携してほしい。

意見　様々な連携をしていることがわかった。今後も、地域等と連携を進めていってほしい。

意見　先日職員に、「これからは、図書館という“ハコ”はなくなっていく可能性があるのではないか」という話をした。私が図書館長として大切にしているのは、図書館の情報としての機能と考えている。そういう意味で、今後、図書館があらゆるところと連携を進めていく中で、居場所としての図書館だけではなく、本として、情報として存在するということも求められていると思っている。

意見　今後も引き続き、様々な公的機関や、団体に留まらず、企業等とも連携して、質の向上を目指していただきたい。また、図書館の知的ネットワークを広げていただきたい。

皆様から色々なご意見ご提案をいただいたので、検討を進めていただきたい。

6　事務連絡

7　閉会